

新規採用教職員辞令交付式
大石健一教育長講話
「新任教職員に期待するもの」

◇日時：令和8年4月1日（水）

◇場所：県立郡山高等学校



辞令交付



教育長講話

新規採用者の代表の方から「小学校の先生との出会いが今の自分自身に大きな影響を与えている」というお話と、力強い誓いの言葉をいただきました。教員という仕事は、「いい仕事だ」と私は心から思います。昨日、前年度で退職された管理職の方々に退職辞令の交付をさせていただきました。30数年の教員生活を振り返り、「いい教員人生だった」「教員を選んで良かった」という思いを述べて職を退かれました。採用された皆さんにも、そのような教職人生を歩んでほしいと思います。

本日の会場である郡山高等学校は、郡山城の二の丸跡地にございまして、ちょうど満開の桜が皆さんの門出を祝福してくれている、そのようなロケーションで辞令を交付できたことを大変嬉しく思います。そして皆さんが私たちの仲間に加わっていただいたこと、本当に嬉しく思います。

まずは厳しい採用試験に合格されましたこと、改めてお祝い申し上げます。これから私たちと一緒に子どもたちのために頑張ってくださいという思いを込めて、先ほど辞令をお渡ししました。赴任先の子どもたちをよろしくお願ひします。

さて、皆さんの職場となる学校について少しお話をします。学校というのは当たり前のようにあるものですが、これは、家庭を離れて一定の集団で行うことを前提とした一つの教育システムです。我が国の近代学校制度について振り返ってみますと、およそ150年前、江戸時代から明治時代になり、近代日本が出来上がる過程において、明治の新政府は何から手をつけたらいいのかわからないほど、問題が山積していました。特に教育面においては、ヨーロッパ列強に追いつくために、彼らが数百年かけてやってきたことを短期間でやらなければ

なりません。ヨーロッパでは古くからの伝統で、教会が初等・中等教育を受けもっていましたが、今までの権威を否定してできた近代日本には、これに代わるものはありませんでした。結局、国が行政機関である文部省をつくって対応することになったわけです。作家の司馬遼太郎氏は「文部省という機関・機能を設けることを考えたのは、明治初期政権の大きな発明だった」と述べています。

1872年（明治5年）の学制発布により近代教育制度が始まり、以後3年間でどれだけの小学校ができたと思いますか。ちなみに現在、全国の小学校は約1万8000校です。しかし、明治の学制発布からわずか3年間で約2万4000校もの小学校がつくられました。これは当時の地域の方々の協力があってこそできたことです。教育が日本の近代化に果たす役割への期待は相当大きかったと言えます。

シンガポールの政策文書には「シンガポールの教師は国家の建設者である」と書かれていますが、これはどの国でも同じです。奈良県で採用された皆さんもその自覚をもってください。ちなみに、近代小学校の始まりは学制発布より3年早い1869年（明治2年）、京都の町衆の寄付でできた「番組小学校」に遡ります。幕末の騒乱、東京遷都で衰退の危機に瀕していた京都の町衆が、復興に向けて力を入れたのも教育だったのです。番組小学校の一部の建物は現在、ホテルとして活用されており、当時の面影を見ることができます。そこから、教育にかける意気込みや予算の大きさを窺い知ることができます。

番組小学校は単なる学び舎ではなく、「地域自治の拠点」や「伝統的コミュニティの中心施設」としての役割も果たしていました。「学校」は地域の誇りであり、高い期待に応え続けてきたのです。その「学校」が皆さんの職場であることを自覚してください。文部科学省の令和8年度予算案を見ても、義務教育費や就学支援など学校関係に巨額の予算が投入されており、市町村や県も多大なコストをかけて「学校」というシステムを維持・運営しているのです。

先ほど、学校というのは一つの教育システムに過ぎないという話をしました。しかし、「家庭を離れて一定の集団で行われる」という、このシステム的前提を初めて失ったのが、6年前の2020年春に始まった新型コロナウイルス感染症による一斉休校でした。我が国では、戦時中でさえ学校を閉じることはありませんでした。新型コロナウイルス感染症が5類感染症に移行してからまだ3年しか経っておりませんので、皆さんの記憶にも新しいと思います。当時、私は県立学校の入学者選抜を担当する部署にいて、安全に入試を実施するための対応を考えなければならなかったのですが、相手が得体の知れない未知のウイルスであり、大変難しいことでした。保健所はパンク状態、それを支える県庁の疾病対策課も戦場のようでした。何度も足を運んで、このウイルスへの対処法を考えるため最新情報を得ようとしていましたが、よく分かりません。特別支援学校の入試は書類審査としましたが、高校はそうもいきません。何人まで検査室に入れてよいか、素手で試験問題の配布・回収、採点を行っても大丈夫か、試験監督の防護服は必要か…。そして、何とか無事に入試を終えることができたと思ったら、突然、全国一斉休校が始まったのです。

最近、瀬尾まいこ氏の『私たちの世代は』という本を読みました。この小説は、コロナ禍の学校が舞台となっています。主人公は小学校3年生の二人の児童です。一人は、母子家庭の岸間冴、もう一人は教育熱心な母親をもつ江崎心晴です。コロナ禍による休校がようやく明けて分散登校が始まったとき、心晴はクラスメイトと共有する机の奥に手紙が入っていることに気付き、やりとりが始まります。そのやりとりが楽しく、「分散登校が終わったら二人で会おうね」と約束を交わし、心晴は、その約束を心の拠り所として毎日を過ごしていました。ようやく一斉登校になり手紙の相手に会うことが叶うという日に、母親が、「まだ危ないから学校へ行ってはいけない」と言います。心晴は学校へ行きたいと訴えましたが、その願いを叶えてもらえず、そのまま不登校になってしまいます。

先ほども申しましたが、学校教育というのは、家庭を離れて一定の集団で行われます。コロナ禍において、この大前提が失われたことにより、私は改めて「学校教育とは何か」と考えさせられました。発達段階にもよりますが、学びの本質は自学自習だと思います。インターネットや書籍等で得られる知識、ただ、それだけではない。授業をきっかけにさらにいろいろなことを知りたくなり、学んだことを基に対話し、その知識をより確かなものにする。それにはなにかが必要であり、そういった学びの場、子どもが一人ではできないこと、自宅にはできないことを提供する場。学校は、わざわざ徒歩や電車で来なければできない学びや経験がある場でなければならないと思います。

『私たちの世代は』の中で心晴は、オンライン授業もはじめは面白く、ネットを通して知らない人と話せて扉が開いたような気もしたが、それにも慣れると、「パソコンの画面でできることは、退屈だった」と言い、「思いっきり運動場を走ったり、友達の思いがけない発言に笑ったり、先生に怒られたり、友達と秘密の話をしたり、パソコンの中にはない、あのだきどきとわくわくがほしいのだ」と、また後年振り返って、「誰かと交わす言葉がどれだけ支えになるのかを、そしてその人と会える喜びが何ものにも代えがたいことを知った」と述べます。新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい始めた頃は、オンラインで授業をするための環境が整っていませんでした。その中で、先生方は教育を止めないために一生懸命に取り組みましたし、子どもたちも何とか勉強をしようと頑張ってくれましたけれど、心晴のように、何か物足りないと感じるところはありました。「隣に友だちがいる」、学校の良さはそこにあるのだと感じました。勉強は一人でもできます。しかし、友だちがそばにいて励まし合い、競い合うからこそ頑張ることができる。そして見守ってくれる教職員がいる、そんな環境において学びは進んでいくのだと思います。これらのことは、学校教育において必要不可欠なものです。

ちなみに冴は、コロナ禍の中、育児放棄されている同級生、青葉を助けることになったことを振り返り、その地域の子どもたちを把握し、その子どもたちに何かあれば救い出せる、学校こそがセーフティーネットだ、余計なおせっかいだと気を遣うこともなく、堂々と子どもに手を差し伸べることができるのが教師だと述べています。「もっとわたしたちを見てほしい。あのときそう言えなかったわたしは、自分が助けられる立場になりたい」。そう言っ

て、冴は小学校の先生になります。皆さんにも、子どもたちをしっかりと見る、そんな先生になっていただきたいと思います。

私が校長を務めていた学校の定時制課程では、生徒の多くが不登校経験者だったこともあり、行事が少なかったのですが、せっかく高校に通おうとしているのだから、全日制課程にあるような行事はみんなやって、楽しかった思い出をつくろうと、生徒に行事の企画をしてもらいました。そういうのが苦手な生徒もいるのでみんなによかったかは分かりませんが、奈良県の学校が、行けば何か楽しいことがある、「どきどきとわくわく」がある、そんな学校であってほしいと思っています。

学校が楽しいところであるためには、学校生活の中で多くの時間を費やす授業が楽しくなければなりません。ですので、授業者である教員の皆さんには、「どきどきとわくわく」のある授業を展開していただきたいと思います。これには、少し努力が必要になってくるでしょう。ご自身の技術を磨いたり児童生徒への理解を深めたりすることが必要となってきます。そしてご自身も「どきどきとわくわく」をいつまでも忘れないでください。NHKの『プロフェッショナル 仕事の流儀』という番組で、高齢の鰻職人の方が、「仕事に探求心がなくなったら、その時点でそれは『作業』になる」と仰っていました。手慣れてくると要領は良くなりますが、探求心を失えば子どもに見透かされます。授業が「作業」にならないよう、常に新鮮な気持ちで子どもたちや教材と向き合ってください。また、多くの弟子を育てたその職人の方は、「教えるとは飽きずに我慢すること」だとおっしゃっています。子どもたちが常にいいコンディションとは限りませんが、どれだけの「どきどきとわくわく」を与えられるかを常に考えてください。自分たちよりも後の世代が自分たちよりも幸せになれるように教育は、教師はあるのだと私は思っています。

さて、次に学校事務職員の方にもお願いがあります。平成27年の中央教育審議会答申を受けて学校教育法が一部改正され、第37条14項「事務職員」は、「事務に従事する」から「事務をつかさどる」となりました。学校事務職員は学校における唯一の「総務・財務の専門職」です。その専門職であることに誇りをもちながら、専門性を遺憾なく発揮していただくとともに、教職員と連携して教育環境を整える、「チーム学校」の一翼を担ってください。どんなにIT化が進んだとしても、教職員や管理職とのコミュニケーションを欠かさず、風通しの良い職場環境を整えてください。そして、校長が行う学校経営の補佐としての役割を担ってくださることを願っています。

最初から全てがうまくいくことはありません。それは、当たり前のことです。成果が見えなくても諦めたり、自分を責めたり、くじけたりせず、最後まで子どもたちの力を信じることを、退職する日まで忘れないでいてほしいと思います。と同時に、子どもに対しても謙虚に、自らの力、教える力や人間力も含めて、自分を磨いてください。ただ、くじけそうになったら、迷わず上司や周りのなかまに、学校で解決することが難しいと感じるのであれば、市町村教育委員会や私たち県教育委員会に相談してください。

それから、ここにいらっしゃる方は皆さん、学校で勤務する、子どもが家族以外で日常過

ごす時間が多い大人、ロールモデルです。子どもたち、教え子たちのために授業や児童生徒理解、事務処理能力の向上を目指して努力していただくことはもちろんのこと、身近な「よい大人」として身を慎むということ、そして子どもたちから信頼される人であろうとすることが求められます。「先生」は退職してからも、一生「先生」です。「よい先生」であるには、覚悟と努力が必要だと私は思っています。法律や規則で決められているからということではなく、子どもたちのことを思えば、教え子たちのことを思えば自ずとそうなるということです。ぜひ皆さんには一生を「よい先生」であり続けてほしいと思っています。

皆さんに交付される辞令の冒頭には、「奈良県教育委員会が皆さんを教職員として採用して、奈良県の子どものための教育をあなたに託す」という意味の言葉が書かれています。これから、皆さんがそれぞれの学校で子どもたちと共に過ごしていくときに、ここに書いてある言葉を忘れることなく、高い倫理観と誇りを胸に、本県教育に尽力をしていただけることを強く期待をしております。皆さんが十分に力を発揮するためにも健康に御留意いただき、奈良県の教職員としての一步をしっかりと踏み出していただくことをお願いして私からの話といたします。